

東広島市長者スクモ塚第1号古墳測量調査

下江 裕貴・永野 智朗・藤澤 昌弘

1. はじめに

長者スクモ塚古墳群は広島県東広島市西条町御菌宇に所在する（第1図）。本古墳群は古くからその存在が知られていたようであり（池田 1954、鈴木・池田 1950、松崎ほか 1954）、広島大学考古学研究室は数度にわたって測量調査を行ってきた。その成果の一部は『広島県史』（松崎 1979）や『前方後円墳集成』（近藤編 1991）で公開されてきたが、墳丘測量図や出土遺物の実測図は公開されておらず、これまでその位置づけが曖昧であった。

また、近年の広島大学考古学研究室では三次・庄原地域における帆立貝形古墳の測量調査とその報告を行ってきた（村田ほか 2014、平尾ほか 2015、池西ほか 2016）。そのなかで、長者スクモ塚第1号古墳が備北地域とは異なる形態をもつ帆立貝形古墳である可能性を指摘していたが、上記の理由から詳細な検討が困難な状況であった（池西ほか 2016）。このため、当古墳群に関する既往の調査成果を整理し、墳丘規模や埋葬施設などを明らかにすることを目的に、2016年8月より広島大学文学部考古学専攻の実習授業（野外考古学実習）として当古墳群の測量調査ならびに発掘調査を行った⁽¹⁾。本報告はそのうち2016年8月から9月に実施された長者スクモ塚第1号古墳の測量調査（第1次調査）の概要と、表採されてきた埴輪片の紹介をまとめたものである⁽²⁾。（永野）

2. 長者スクモ塚古墳群の環境

(1) 地理的環境

長者スクモ塚古墳群が所在する広島県東広島市は広島県のほぼ中央、世羅台地から南西へつづく賀茂台地西部に位置している。東広島市の中心部となる西条盆地は、花崗岩地帯からなる山地部と、沖積層ならびに洪積層からなる盆地面によって形成されている。この洪積層の多くは西条砂礫層と呼ばれ、かつて盆地一帯が湖であった頃の湖底堆積物からなる。標高200mを超える西条盆地から流れ出る河川についてみると、盆地内を南流して呉市広町で瀬戸内海に注ぐ黒瀬川、盆地内を南流して海田町で広島湾に注ぐ瀬野川、盆地内を東流して三原市で瀬戸内海に注ぐ沼田川がある（藤田 1977）。

当古墳群は西条盆地南西の西条町にある独立した丘陵上（現広島大学西条共同研修センター裏山）に位置しており、周辺平地からの比高は約30mである。南側からそれぞれ第1号古墳、第2号古墳、第3号古墳の順に所在している。ただし、一部の文献に記載された号数と現在の古墳の号数は異なっており、本報告では現状の呼称に従う⁽³⁾。

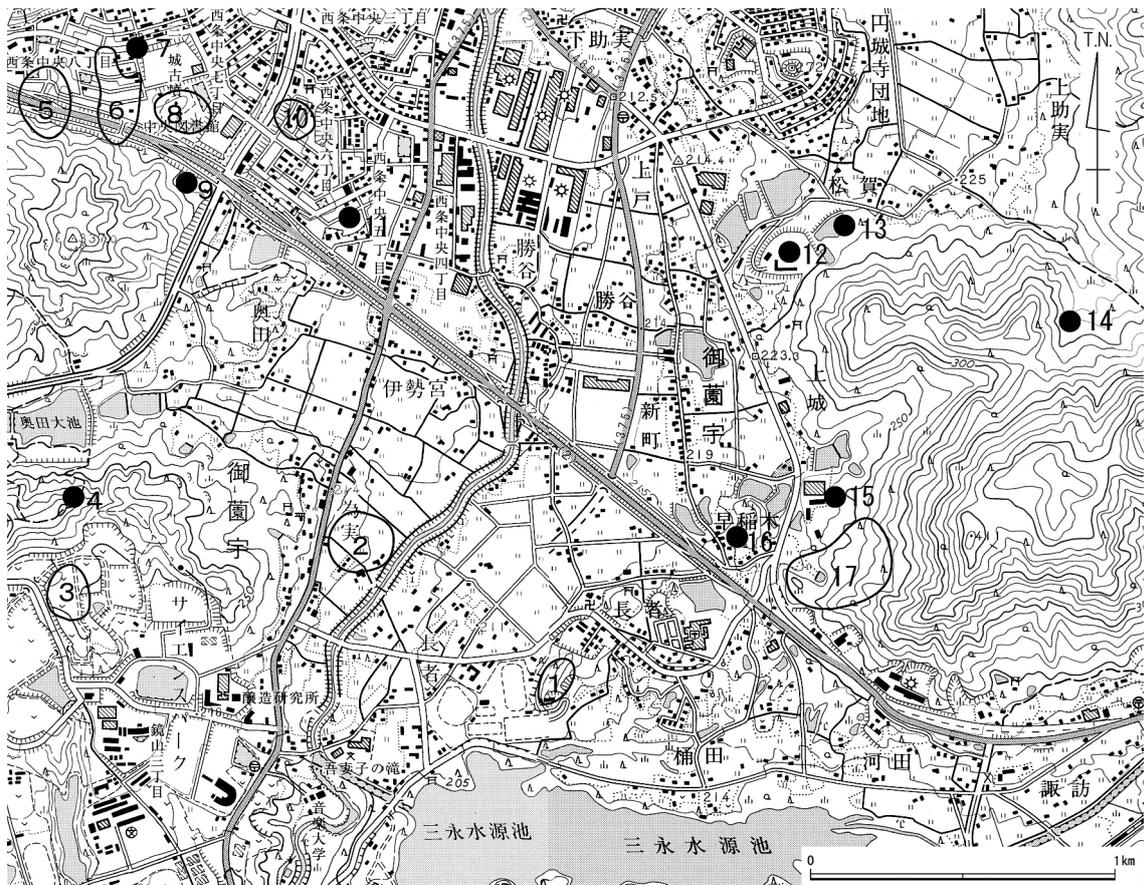
(2) 歴史的環境

西条盆地では、開発事業に先立つ発掘調査や広島大学埋蔵文化財調査室による学術調査等が継続的に実施されたことで、多くの遺跡が確認されている。ここでは古墳時代を中心に西

条盆地の遺跡を概観する。

古墳時代前期には高屋町を中心に古墳が築造される。高屋町才が迫第1号古墳は墳丘長約11.2mの方墳であり、出土土器などから4世紀初頭に位置づけられている(大上1993)。同じく高屋町原の谷古墳は墳丘径(長)約23.5mの円墳または方墳であり、才が迫第1号古墳につづく4世紀前半の築造とされている(出野上2003)。4世紀後半になると、西条町でも古墳が築造される。西条町白鳥古墳は墳丘規模などが明らかでないものの、仿製三角縁神獸鏡の出土が伝えられており、4世紀後半に位置づけられている(松崎1979、古瀬1991)。また、西条町丸山神社第1号古墳は墳丘長約42.9mの帆立貝形古墳とされており、出土した壺形埴輪から4世紀末の築造とされている(藤野2015)。高屋町千人塚古墳は墳丘径約24.0mの円墳であり、出土遺物から4世紀末の築造とされている(古瀬編2010)。

古墳時代中期になると、西条町に墳丘長約92.0mの前方後円墳である三ッ城第1号古墳が築造される。三ッ城第1号古墳は広島県下でも最大規模の前方後円墳であり⁽⁴⁾、造出から出土した須恵器や埴輪などによって5世紀前葉に位置づけられている(石井編2004)。三ッ城第1号古墳以降、当盆地ではしばらく有力墓の造営が途絶えるが、高屋町森信第1号古墳は



第1図 長者スクモ塚古墳群周辺遺跡分布図 (1/25,000)

1. 長者スクモ塚古墳群
2. 宮の前遺跡
3. 鏡千人塚遺跡
4. 鏡山古墳
5. 大槓遺跡群
6. 助平2号遺跡
7. 助平古墳
8. 三ッ城古墳群
9. 八幡山古墳
10. 狐が城跡
11. 古市古墳
12. 松賀山遺跡
13. 松賀古墳
14. 西の谷古墳
15. 龍王山古墳
16. 京塚古墳
17. 卯月城古墳群

墳丘長約30.0mの前方後円墳であり、表採された遺物などから5世紀末葉から6世紀初頭頃の築造とされている（石井 1990）。

古墳時代後期になると、西条盆地でも横穴式石室をもつ古墳が築造される。西条町助平古墳は墳丘径約12.0mの円墳であり、竪穴系横口式石室をもつ。出土遺物から6世紀中葉の築造と想定されており、西条盆地における最古の横穴式石室をもつ古墳である（石井 1992）。その後も横穴式石室をもつ円墳が多く築造されており、代表的なものとして高屋町原田岡山第1号古墳（恵谷 1994）や西条町御菌宇龍王山古墳（脇坂 1997）などが挙げられる。

なお、西条盆地では7世紀代の古代寺院は確認されていないが、西条町には安芸国分寺跡があり、主要堂塔や周辺建物の調査が行われた（中山 1999ほか）。（藤澤）

（3）既往の調査

長者スクモ塚古墳群はこれまで4度の調査が行われており、以下に既往の調査の概略について紹介する。

人骨の鑑定 広島県立大学助教授の鈴木誠氏と助手の池田次郎氏によって、長者スクモ塚古墳群より出土した人骨の鑑定が行われた（鈴木・池田 1950）。直径5mの円墳内に花崗岩を用いた箱形石棺が2基存在し、うち1基からは小児人骨、小型の鏡、管玉、鉄刀子が出土したとされるが（鈴木・池田 1950、池田 1954）、人骨の写真以外、これらの遺物および実測図や写真などは現在確認できない。この際に調査された古墳は第3号古墳と推定される。

1953年の調査 1953年には三ツ城古墳群の発掘調査に関連し、当時広島大学文学部助教授の松崎寿和氏らによって長者スクモ塚古墳群の石棺が図化された（松崎ほか 1954）。この際に調査された石棺は形状・寸法より第2号古墳の箱形石棺と考えられる。

1970年の測量調査 1970年には当時広島大学文学部助手の川越哲志氏と学生らによって、第1号古墳の測量調査が実施された（図版第1 a）。この調査では等高線間隔50cmの墳丘測量図が作成されるとともに、埴輪片や土師器片が表採された。なお、現地の案内板はこの際の調査成果をもとに製作されたようである。

1996年の測量調査 1996年には当時広島大学文学部助教授の古瀬清秀氏と助手の安間拓巳氏、学生らによって再び測量調査が行われた。この調査では一部を除いて等高線間隔25cmの第1号古墳および第2号古墳の墳丘測量図が作成された。また、第1号古墳から表採された埴輪片と第2号古墳に露出していた箱形石棺の簡略な実測が行われた。

（4）長者スクモ塚古墳群の概要

長者スクモ塚古墳群の概要についてはいくつかの文献に記載があるが、今回はそのうち『広島県史』と『前方後円墳集成』の記述について紹介する。

『広島県史』（松崎 1979） 1979年刊行の『広島県史』によると、長者スクモ塚古墳群は3基の円墳で形成され、いずれも5世紀代のものと推定されている。第1号古墳は墳丘径約40.0m、高さ約6.0mの円墳で南西部に造出をもち、墳丘に葺石や円筒埴輪が認められるとされる。第2号古墳は墳丘径約10.0mの円墳で墳頂に箱形石棺があるとされる。第3号古墳は墳丘径約8.0m、高さ約2.0mの小円墳で、墳頂に2基の箱形石棺があり、石棺内から人骨、獣形鏡

1面、管玉2点、鉄刀子片などが出土したとされる。なお、『広島県史』に記載されている第3号古墳は現在の第2号古墳を指しており（永野 2018）、先述したように当古墳群の号数は過去に変更されていたことが判明した。

『前方後円墳集成』（古瀬 1991）1991年刊行の『前方後円墳集成』によると、長者スクモ塚第1号古墳は墳丘長約63.0mの帆立貝形古墳とされる。広島県の帆立貝形古墳のほとんどが前方後円墳集成編年の7期以降であることから、集成編年6期の三ッ城第1号古墳より長者スクモ塚第1号古墳は後出するものとされている。一方、注釈では糸井大塚古墳で表採された埴輪の検討から、広島県における帆立貝形古墳の出現が集成編年6期以前となる可能性が高いことも指摘している。これにより、長者スクモ塚第1号古墳と三ッ城第1号古墳との編年の位置づけが逆転する可能性が指摘された。（下江）

3. 調査日程と方法

(1) 調査日程

第1号古墳の測量調査は長者スクモ塚古墳群第1次調査として、2016年8月20日から25日、9月3日から14日までの計18日間実施した。まず、本調査に先立って2016年8月18日に現地調査を行い、墳丘の現状を確認したほか、1996年調査時の永久杭（P.0, P.20）を発見した。本調査は、8月20日の午前に伐採と杭の設置を行ったあと、午後から各測点の測距と測角を開始した。この作業を24日まで続けたが内角の誤差が大きかったため、各測点の内角の再計測を8月25日と9月3日に行い、内角の誤差が許容範囲内に収まったのちに平板測量を開始した。平板測量時には3班に分かれ、2班は測量班としておもに墳丘および周辺地形の測量を行った。そのうち、1班は墳丘の北西側から西側にかけての234.00～238.00mの範囲内を、もう1班は南西側から南東側にかけての232.50～237.75mの範囲内を測量したほか、それぞれ道や崖、石段などの改変地形も追加した。残りの1班は墳丘観察班として葺石や表採埴輪、白礫の散在を確認してその位置を記録したほか、墳裾周辺の傾斜変換の観察も行った。9月7日に図面上のいくつかの杭位置と現地の杭位置との間でトラバースとしての許容範囲を越える誤差を図面上で確認したため、9月8日から10日にかけて墳丘観察班が各測点の距離と角度を再測し、トラバースの設定を再度行った。この際に発生した誤差は図面上では1mmほどであったため、墳丘測量図には大きな影響を及ぼさないと判断して既に測量した等高線の修正は行わなかった。また、トラバースの再設定の間も並行して測量を継続した。平板測量は9月14日の午前まで実施した。14日の午後に設置した杭を残して現地の片付けを行って撤収し、長者スクモ塚古墳群第1次調査の全日程を終了した。

(2) 調査方法

第1次調査では1996年作成の墳丘測量図に加筆・修正する形で測量図を作成した⁽⁵⁾。測量図の作成は閉合トラバースと、一部開放トラバースを用いた平板測量によって行った。トラバースの設定にはTOPCON社製のオートレベルAT-G1、SOKKIA社製のオートレベルC310、TOPCON社製のトータルステーションCS-101F、NIKON社製のセオドライトNE-

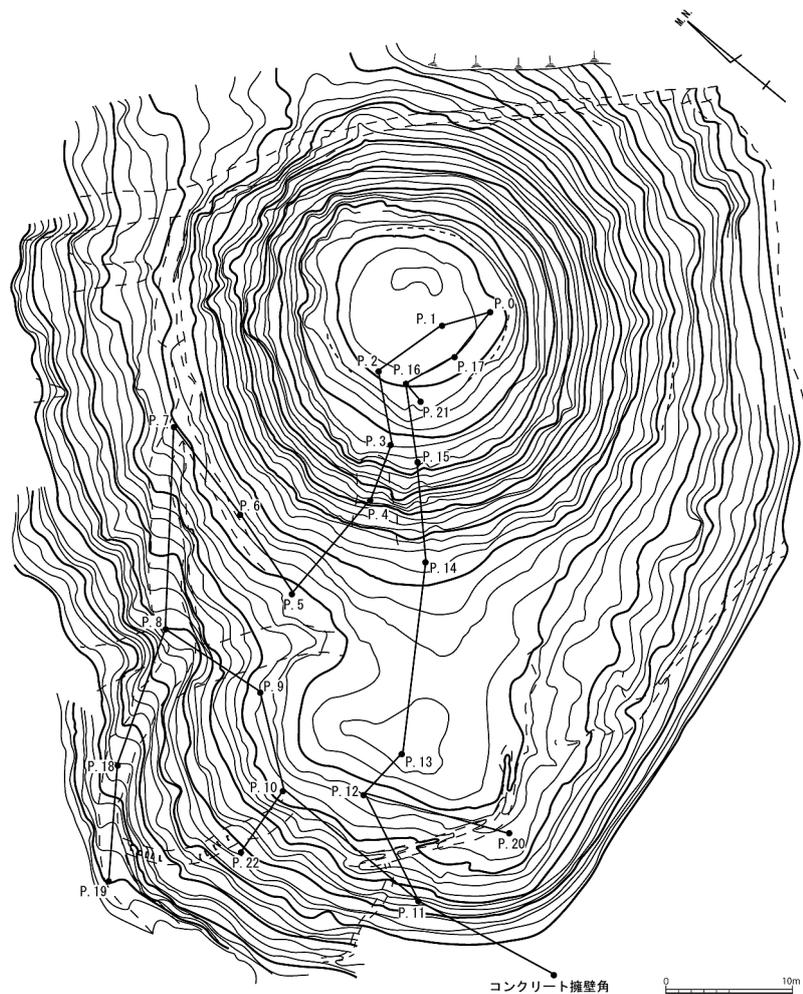
20LC、LEICA 社製のトータルステーション TCR307を使用した。また、平板測量には TOPCON 社製のオートレベル AT-G1、SOKKIA 社製のオートレベル C310を使用した。

トラバースの設定 閉合トラバースの設定にあたり、17本の杭を設置したうえで、後円部墳頂に設置されたコンクリート製永久杭 (P.0) を含めて計18本の杭で閉合トラバースを組み、各測点の測距と測角を行った。また開放トラバースを P.8から P.18と P.19へ、P.10から P.22へ、P.11からコンクリート擁壁の角へ、P.12から P.20へ、P.16から P.21へそれぞれ設置し、各測点の測距と測角を行った。なお、P.20と P.21は1996年の調査時に設定された永久杭を本調査のトラバース内に再設定したものである。方位角の測角は SUUNTO 社製の方位磁石 KB-14/360R をトランシットに取り付け、P.0の方位角を測角した。P.0の方位角は5回の測定値の平均値を算出し、違算が起きる可能性を減らすため、最も近い5の倍数になるように調整した。また、図面上の永久杭 (P.0, P.20) とコンクリート擁壁の角の位置が現状の位置と一致したため、1996年作成の測量図と本調査のトラバースの整合性はとれていると判断した (第2図)。

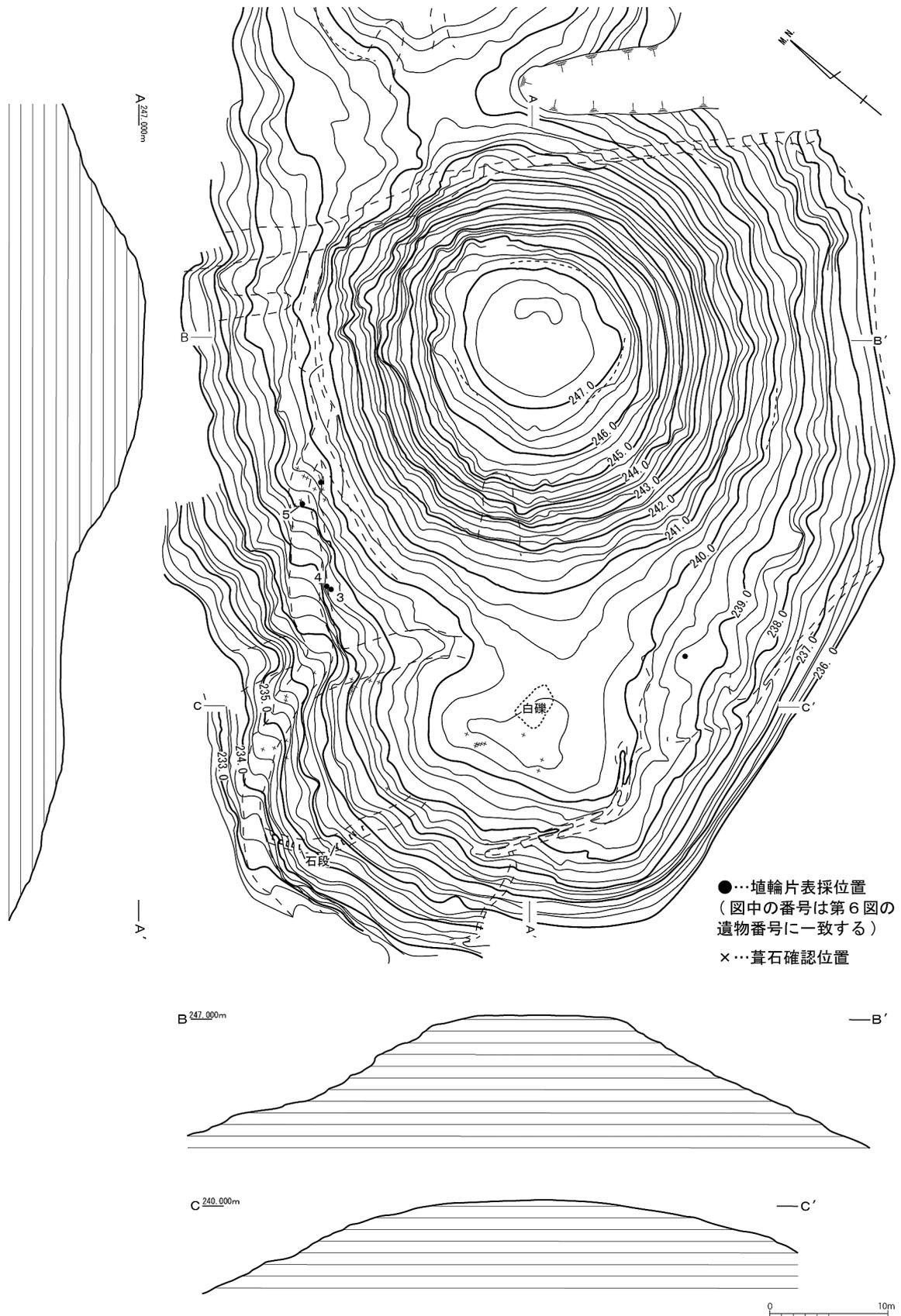
標高の設定 実際に標高を数点測ったところ、1996年作成の墳丘測量図と現状がほぼ一致したため、1996年当時と現

在で大きな地形の改変はないと判断した。よって、1996年作成の測量図に記載されていたコンクリート製永久杭 (P.0) の標高247.20mを本調査で用いる標高として設定した。

トラバース計算 レベル差に関しては測点のレベル差が全体で+1mmになったため、レベル差の最も大きかった P.14-P.15間のレベル差を-1mmとして調整した。内角に関しては各内角の誤差が全体で±1'を許容誤差としたところ、現地での測定値をもとに計算すると1'50"の誤差が算出されたため、何度か各内角の再計測を行った。



第2図 測量杭配置図 (1/600)



第3図 長者スクモ塚第1号古墳墳丘測量図 (1/500)

最終的には $-10''$ の誤差となったので、最も内角の大きいP.5を $+10''$ として配分調整した。経距は誤差が許容範囲内でおさまり、緯距は誤差が -4cm だったので、側線のうち絶対値が大きいものから4つの側線(P.6-P.7, P.7-P.8, P.8-P.9, P.10-P.11)に緯距の誤差を配分した。

紙割り 上記の誤差配分の結果、算出した各杭の座標を方眼用紙上に200分の1の縮尺で記録した。古墳の規模が大きいため、1996年作成の墳丘測量図と各杭の位置を4枚のマイラーシートに分割して写し取ったが、その際に各マイラーシートが隣り合うマイラーシートと少なくとも2本以上の杭位置を共有するように分割した。

平板測量 測量は3台の平板を用いて行い、等高線間隔25cm、縮尺100分の1の平板測量図を作成した。測量点の計測については縮尺の大きさを考慮し、測量領域全体にわたり $\pm 5\text{mm}$ を許容範囲とした。平板測量では1996年作成の墳丘測量図に北西から南西、南東側にかけての周辺地形を大きく加筆した(おもに232.50~238.00mの等高線の範囲)。ほかにも道や崖、石段などの改変地形、表採埴輪や葺石の位置、白礫の散在範囲、傾斜変換も追加して記録した(第3図)。 (下江)

4. 測量調査の成果

(1) 墳丘の遺存状況

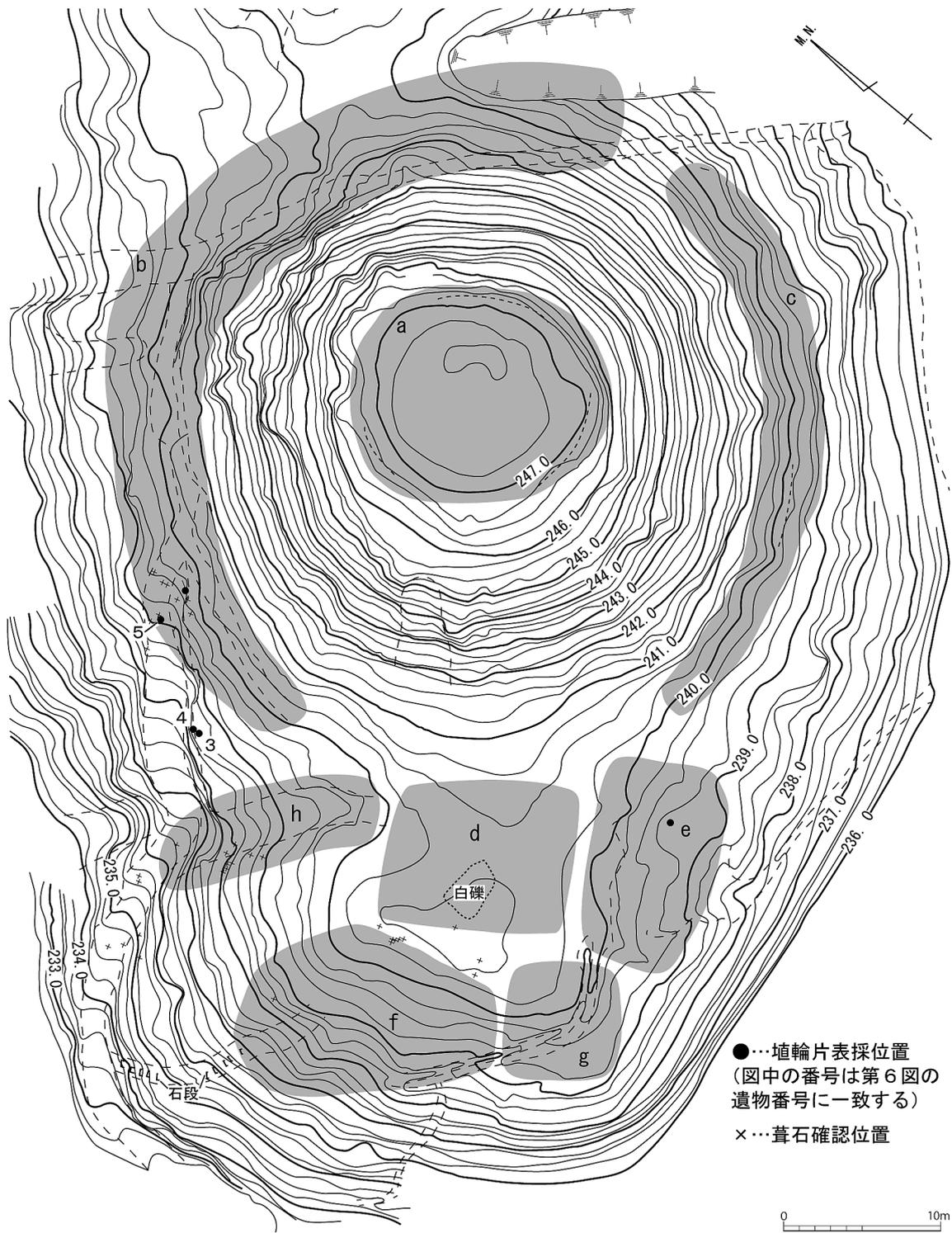
後円部 後円部北側の崖面など数か所で地山と盛土の境が確認されたため、後円部は自然地形を利用して地山を削り出した後に盛土を行った可能性がある。後円部墳頂は247.25mの等高線が正円に近いことから、墳丘が良好に遺存していると思われる(第4図a)。

後円部の墳裾付近のうち北東から北西、西側にかけては林道を造成する際に削平され、墳裾らしき傾斜変換は確認できなかった(第4図b)。一方で東側から南東側にかけては墳丘の遺存状態が良く、239.75~240.00mの間で傾斜変換が確認され、239.75m付近が後円部の墳裾になると想定した(第4図c)。なお、後円部では段築などは確認できなかった。

前方部 前方部上面のほぼ中央には長石の角ばった白礫が散在している(図版第6b)。当初は築造時に散布された可能性も考慮した。しかし、これらの白礫と類似したものが後円部の地山が露出している崖面でも確認できたため、こういった白礫は元来より地山にも含まれていたと思われる。よって、本古墳で確認された白礫の散在は人為的なものではない可能性もあり、将来的には発掘調査で確認する必要があるだろう。白礫が元来より地山に含まれていたものと考えれば、前方部上面では風化していない白礫が地表に散見されているということになる。よって、前方部上面は削平を受けて白礫が露出している可能性も想定できる(第4図d)。

そして、削平された前方部上面の土はおもに前方部南東側の側面に流出したと思われる。そのため、前方部南東側の側面では等高線が乱れ、墳裾にあたる傾斜変換が確認できなくなっているものと考えられる(第4図e)。

また、前方部前面のうち、南西側は237.00~239.00m付近まで等高線の変化がほぼ一定であるうえ、234.00~237.00mにかけて後世のものと思われる石段が存在している。さらには



第4図 長者スクモ塚第1号古墳墳丘遺存状況 (1/400)

239.00～239.25m 付近では上方から流れた土が堆積して形成されたとと思われる平坦面が観察できた。以上のことから、前方部前面の南西側は後世の改変を大きく受けているものと考えられる(第4図 f)。一方で、前方部前面の南側隅角は239.25～239.50m 付近で等高線がほぼ直角に屈曲する傾斜変換が確認され、239.25～239.50m 付近の平坦面では流れた土の堆積

が確認できなかった。そのため、前方部前面の南側は墳丘の遺存状態が良く、239.50m付近が前方部の南側隅角の墳裾になると想定できる（第4図g）。

くびれ部 現状のくびれ部は北西側が大きくくびれているため、後円部と前方部がくびれ部で折れ曲がって繋がっているように見える。長野県更埴市森將軍塚古墳（岩崎ほか 1992）のように後円部と前方部がくびれ部で折れ曲がって繋がる例はあるが、本古墳の北西側くびれ部は林道造成の際に削平されたと考えられる。よって、本来の墳形は前方部と後円部がくびれ部で折れ曲がらずに繋がっていたと推察できる（第4図h）。一方で、南東側くびれ部の240.00mより低い部分は前方部にかけて等高線が大きく乱れているため、後世の改変を受けたものと考えられる。

外表施設 前方部前面付近や前方部西側、後円部西側などを中心に葺石や埴輪片が確認されたが、これらはほとんどが原位置を留めていないと思われる。また、1970年の測量調査時の日誌には、後円部墳頂平坦面の東側や墳丘東側の240.00～240.25mの間で埴輪片が直立して埋まった状態で確認できたと記述されており、墳頂や墳裾に埴輪が並べられていた可能性がある。

埋葬施設 今回の調査では埋葬施設については明らかにすることはできなかった。しかし、1996年の調査時には、墳頂部に小動物の活動によるものと思われる径50cmほどの穴が開いており、そこから白色の粘土が確認できたという。ピンポールによる地中探査では石材などが確認できなかったことから、粘土槨を埋葬施設にもつ可能性も考えられるだろう⁽⁶⁾。

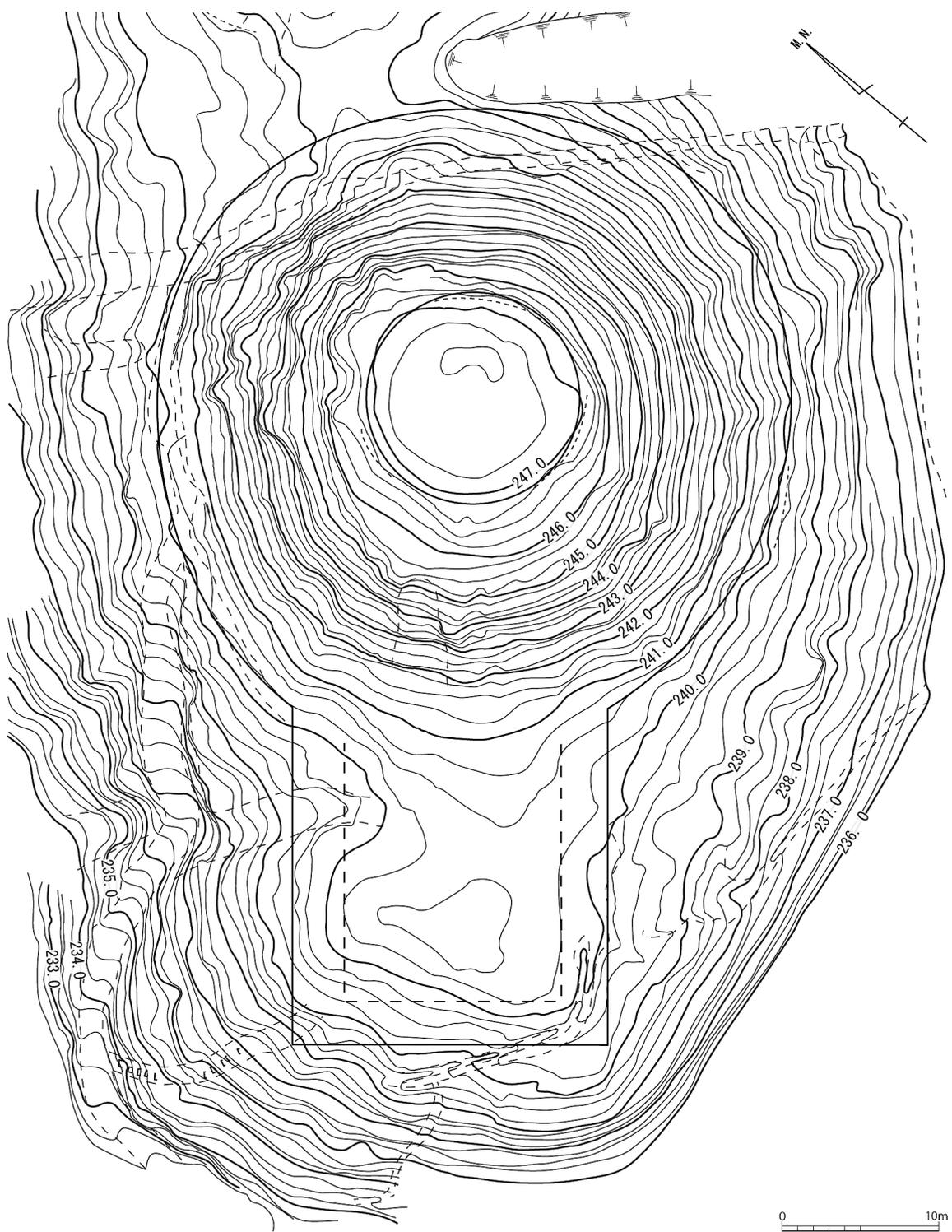
（2）墳丘復元

前小節で述べた墳丘の遺存状態をもとに墳丘を復元する（第5図）。

墳丘基底面 後円部の墳裾と想定される傾斜変換は丘陵斜面に面している後円部南東側では239.75m付近で、丘陵の尾根線上に近い後円部東側や南側では240.25～240.50m付近である。また、前方部の墳裾と想定される傾斜変換は239.50m付近であるため、後円部の墳裾よりやや低くなっている。以上のことから、本古墳は自然地形を利用して築造されたため、墳丘の基底面が前方部に向かってやや傾斜していた可能性がある。

後円部 後円部東側から南東側にかけては墳裾と想定できる傾斜変換を確認したため、それに基づいて墳裾を復元した。一方で、後円部北東から北西、西側にかけては墳丘の遺存状態が悪く、傾斜変換から墳裾が復元できない。しかし、後円部の墳丘は南東側より北西側の方が全体的に扁平な形態をしているため、北西側の墳裾も南東側より少し扁平になるように復元した。その結果、後円部は墳丘主軸方向に少し長く伸びる楕円形と想定できる。

前方部 前方部上面は削平を受けていると考えられるため、現状の地形からは前方部上面を復元できない。しかし、240.50mの等高線が後円部から前方部に向けて張り出しているため、前方部上面の高さは240.50m付近であった可能性がある。さらに、本古墳と立地条件や築造時期、墳丘の形態が近い丸山神社第1号古墳は前方部上面の高さが地形の傾斜に合わせて先端方向に向かって低くなる（藤野 2015）。この例を参考に、長者スクモ塚第1号古墳は前方部上面の先端を240.25m付近に想定した。



第5図 長者スクモ塚第1号古墳墳丘復元図 (1/400)

前方部南東側の上面端部は240.50mの等高線が後円部から前方部へ張り出す地点と前方部前面側の240.25mの等高線を結んで復元した。一方で、前方部南西側と北西側くびれ部付近は著しく削平されたと考えた。ただし、前方部北西側の239.50～240.00m付近の等高線が古墳の主軸と並行するため、これらの等高線を参考にして前方部北西側の上面端部を復元した。

その結果、前方部上面と後円部墳裾の高さがほぼ同じになり、後円部の墳裾が前方部の上面に揃うように古墳の基底が傾斜していた可能性がある。

前方部墳裾は前方部南側の239.50m付近にある隅角と想定できる傾斜変換から、前方部南東側と前面の墳裾を復元した。前方部北西側については239.25～239.50m付近で若干の平坦面が確認できた。ここを墳裾と仮定すると、前方部上面の主軸線からみて北西側の前方部斜面の方が南東側の前方部斜面より少し長くなるが、丘陵の傾斜勾配は東側より西側の方が大きいいため、北西側の前方部斜面の方が長くなっているものと考えられる。

墳丘規模 上述の墳丘復元の結果、長者スクモ塚第1号古墳の墳丘規模は墳丘長約60.0m、後円部は短径約40.5m、長径約42.5m、高さ約6.5～7.5m、前方部は長さ約19.5m、幅約20.5m、高さ約0.75～1.0mと考えられる。 (下江)

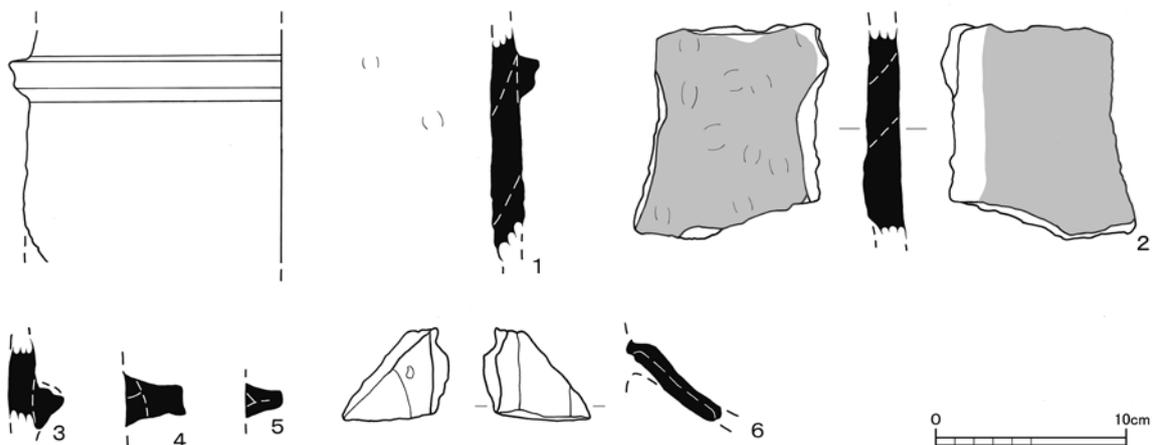
5. 表採遺物

(1) 長者スクモ塚古墳群の表採遺物

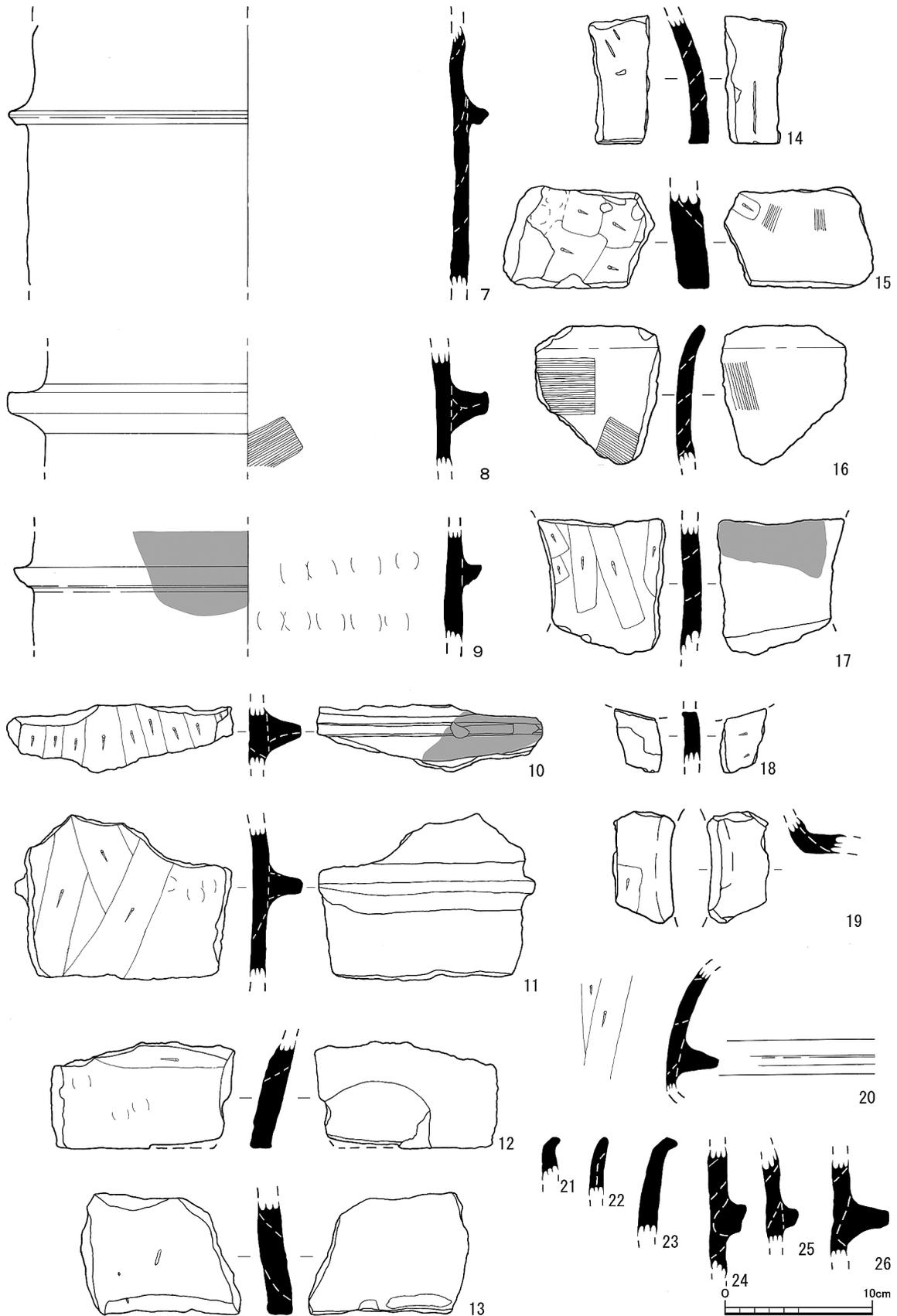
長者スクモ塚古墳群とその周辺からは既往の調査でコンテナ4箱分の須恵器片・土師器片・瓦片・埴輪片が表採された。また、2016年度の第1次調査では第1号古墳から6点の埴輪片を表採した。このうち、須恵器片と瓦片は奈良時代のものと考えられ、三永水源地窯跡群(沢元 2007)に伴うものと推察できる。ここでは長者スクモ塚古墳群に関わる遺物についてのみ触れる。

(2) 第1号古墳の表採埴輪

長者スクモ塚古墳群から表採された埴輪片はコンテナ3箱分にのぼるが、器種や部位が特定でき、図化できたものは26点である。そのうち、遺物の保管状況により第1号古墳表採のものとして判断した埴輪片は6点で(第6図)、残りの20点は表採位置が不明である(第7図)。しかし、第2次調査では第2号古墳から埴輪がまったく確認されなかったため(永野 2018)、表採位置不明の埴輪片も第1号古墳に帰属するものとして取り扱う。確認された器種は円筒埴輪、朝顔形埴輪、蓋形埴輪、家形埴輪で、以下に器種ごとに記述する(第1表)。



第6図 長者スクモ塚第1号古墳表採埴輪実測図 (1/4)



第7図 長者スクモ塚古墳群表採埴輪実測図 (1/4)

第1表 表採埴輪観察表

掲載 番号	表採地点	器種	残存部位	法量(cm)		調整		突帯 分類	色調		備考
				器高 [現存値]	胴部径 [復元値]	外面	内面		外面	内面	
1	1号墳北西 斜面	円筒	胴部	[12.2]	[22.8]		オサエ?	Ⅲ類	10YR8/3	10YR8/4	SSK80
2	1号墳北西 斜面	円筒	胴部	[11.4]			オサエ?		7.5YR7/6	7.5YR7/8	SSK73
3	1号墳後円 部西側斜面	円筒	胴部	[4.7]				Ⅱ類	10YR7/4	7.5YR7/6	SSK6
4	1号墳後円 部西側斜面	円筒	突帯部	[2.7]		オサエ		Ⅰ類	10YR8/6	10YR8/6	SSK3
5	1号墳後円 部西側斜面	円筒	突帯部	[1.8]				Ⅰ類	10YR7/4	10YR7/4	SSK2
6	1号墳後円 部墳裾東側	家形	裾回突帯	[4.2]					5YR7/6	5YR5/4	SSK9
7	不明	円筒	胴部	[17.8]	[27.8]	ヨコナデ	オサエ	Ⅲ類	7.5YR8/6	10YR8/4	SSK25・ SSK26・ SSK27接合
8	不明	円筒	胴部	[7.8]	[25.6]	ヨコナデ	ナナメハ ケ	Ⅰ類	10YR8/6	7.5YR7/6	SSK16
9	不明	円筒	胴部	[7.7]	[31.7]	ヨコナデ	オサエ	Ⅲ類	10YR8/6	10YR8/6	SSK37
10	不明	円筒	胴部	[4.6]			ケズリ	Ⅰ類	10YR7/4	10YR8/4	SSK23
11	不明	円筒	胴部	[11.4]			ケズリ・ オサエ	Ⅰ類	7.5YR7/6	7.5YR7/6	SSK22
12	不明	円筒	底部	[7.2]		ナデ	ケズリ・ オサエ		5YR7/8	5YR7/8	SSK20
13	不明	円筒	底部	[8.2]		ヨコナデ	ケズリ・ ヨコナデ		10YR8/4	10YR8/6	SSK19
14	不明	円筒	底部	[8.6]		ナデ	ナデ		5YR7/8	5YR7/8	SSK71・ SSK72接合
15	不明	円筒	底部	[6.9]		タテハケ・ ケズリ・ヨ コナデ	ケズリ・ オサエ		10YR7/4	10YR8/4	SSK18
16	不明	円筒	口縁部	[9.4]		タテハケ・ ナデ	ヨコハ ケ・ナデ		7.5YR7/6	7.5YR7/6	SSK60・ SSK61接合
17	不明	円筒	胴部	[9.2]		ナデ?	ケズリ		10YR8/4	10YR8/4	SSK49
18	不明	円筒	胴部	[4.3]		ケズリ	ナデ		7.5YR7/6	10YR7/3	SSK8
19	不明	蓋形	受け部立 ちあがり	[2.4]					10YR8/4	10YR8/3	SSK82
20	不明	朝顔形	傘部の下 側突帯	[8.3]		ヨコナデ	ケズリ		10YR7/4	10YR7/4	SSK17
21	不明	円筒	口縁部	[2.9]					7.5YR7/6	10YR8/4	SSK29
22	不明	円筒	口縁部	[4.1]		ナデ	ケズリ・ ナデ		10YR7/4	7.5YR7/6	SSK32
23	不明	円筒	口縁部	[6.9]					10YR7/4	10YR8/4	SSK35
24	不明	円筒	胴部	[8.9]				Ⅲ類	10YR8/3	10YR8/6	SSK14
25	不明	円筒	胴部	[7.0]				Ⅱ類	7.5YR7/6	10YR7/4	SSK21
26	不明	円筒	胴部	[6.7]		ナデ		Ⅰ類	10YR7/3	10YR7/3	SSK13

円筒埴輪 円筒埴輪は23点確認された。いずれも部分的な破片で完形に復元することはできなかったため、それぞれの部位や要素ごとに特徴を述べる。

口縁部片（16、21～23）は先端の形状が角ばったもの（21、23）と丸みを帯びたもの（16、22）があるが、いずれもやや外反している。

透かしをもつ胴部片（17、18）はどちらも形状を正確に復元することはできないが、仮に円形に復元すると直径は17が17cm、18が12cmになり、円形の透かしとしては大きすぎるため、透かしの形状は円形以外の可能性が高い。

突帯をもつ胴部片（1、3～5、7～11、24～26）は12点ある。突帯の先端の形状には角ばっているもの（4、5、8、10、11、26）、丸みを帯びているもの（3、25）、M字状を呈するもの（1、7、9、24）の3種がある。

底部片（12～15）の残存高は6.5cmから8.5cmほどで、突帯まで残存している底部片はなく、第1突帯までの底部高は不明である。

なお、多くの埴輪片は摩耗が激しいため、調整は明瞭には確認できなかった。観察できた調整の多くは横または縦方向のケズリやヨコナデで、ハケが確認できた破片は3点のみである（8、15、16）。また、黒斑が確認された埴輪片は4点ある（2、9、10、17）。長者スクモ塚第1号古墳では現在までのところ、須恵質の埴輪は表採されておらず、本古墳の埴輪は全て野焼き焼成により製作された可能性が高い。

円筒埴輪の胎土に関しては、黄橙色や橙色の胎土に1mm程度の黒色・白色・無色鉱物が含まれているものがほとんどである。ただし、1、23、24は薄い橙色の胎土に1～2mm程度の赤色の粒子が混じっており、この赤色の粒子は土器を破砕して胎土中に混和させたシャモットの可能性がある（図版第6a）⁽⁷⁾。

朝顔形埴輪 20は朝顔形埴輪である。内面が滑らかに外反しているため、傘部下側の突帯部分と考えられる⁽⁸⁾。調整に関しては外面にナデが施されており、内面にケズリが確認できた。また、突帯は2.5cmほど強く張り出し、先端も角ばった形状となっている。

蓋形埴輪 19は蓋形埴輪である。器壁が1.3cmほどと厚く、壁面が内湾しており、端部が上方へ屈曲しているため、傘部の受け部立ち上がり付近の破片である可能性がある。調整は摩耗が激しく確認できなかったが、外面に確認されている黒斑は飾り板の粘土が剥離した痕跡であると思われる。

家形埴輪 6は家形埴輪である。明確な屈曲部をもち、扁平な平面を有していることから、裾回突帯の一部であると考えられる⁽⁹⁾。（下江）

6. 考察

最後に長者スクモ塚古墳群第1次調査の成果をもとに、第1号古墳の築造年代や埴輪、墳丘形態、古墳時代前期から中期における西条盆地の有力墓の発展についての考察と今後の課題を述べたい。

(1) 築造年代

前節で述べた円筒埴輪の特徴から第1号古墳の築造時期について考察する。表採された円筒埴輪の調整や突帯の形態、底部高と突帯間隔の比率などから時期を特定することは困難である。しかし、野焼き焼成により製作された可能性があることや、円形以外の透かし孔が存在する可能性が高いことから、川西編年Ⅱ期からⅢ期に比定され（川西 1978）、前方後円墳集成では4期後半から5期に（広瀬 1991）、実年代では4世紀末から5世紀初頭にあてはまる。このことから、長者スクモ塚第1号古墳の築造時期は、5世紀前葉に比定されている三ツ城第1号古墳より以前に遡る可能性が高いとみられる。

(2) 埴輪

埴輪列の配置 長者スクモ塚第1号古墳からは円筒埴輪をはじめ、朝顔形埴輪や蓋形埴輪、家形埴輪が表採されている。また、動物埴輪が配置されていた可能性もあり⁽¹⁰⁾、本古墳は多種多様な埴輪を有していたと想定できる。しかし、表採された埴輪片のほとんどは表採位置が不明であったり、原位置から離れているため、現時点ではこれらの埴輪が墳丘上にどのように配置されていたのか検討することは困難である。ところで、安芸地域において本古墳と近い時期に築造され、円筒埴輪や朝顔形埴輪、形象埴輪が出土している古墳として東広島市三ッ城第1号古墳や安芸高田市甲立古墳が挙げられる。三ッ城第1号古墳では円筒埴輪や朝顔形埴輪、形象埴輪、器財埴輪が規則正しく整然と並べられていた状況が確認されている(石井編 2004)。甲立古墳では墳頂部から5基の家形埴輪とそれらに伴う石敷区画の配置が判明し、その配置から甲立古墳の被葬者と畿内の大和政権との間には強い関係性が結ばれていたとしている(川尻・沖田編 2015)。長者スクモ塚第1号古墳に関しても、埴輪の器種構成や埴輪列配置が明らかになれば、三ッ城第1号古墳や甲立古墳とも比較できるようになり、畿内との関係性について検討することも可能となるだろう。

円筒埴輪の分類 長者スクモ塚第1号古墳から表採した円筒埴輪群は、突帯を含んだ埴輪片がある程度表採されているため、突帯の差異をもとに分類を行った。突帯の先端の形状が角ばっているものをⅠ類、丸みを帯びているものをⅡ類、M字状を呈するものをⅢ類とした。

突帯の貼り付け方に関しては、粘土紐をそのまま胴部に貼り付けたものと、粘土紐を折り曲げてから胴部に貼り付けたものがみられ、前者はⅡ類とⅢ類に多く、後者はⅠ類に多い。また、Ⅰ類は突帯の長さが2cm以上のものが多く、張り出しが強い傾向が確認できた。一方で、Ⅱ類とⅢ類は突帯の長さが1.5cm未満のものがほとんどで、張り出しが弱い傾向にある。このようにわずかな資料数ではあるものの、突帯の形状は張り出しの強さや貼り付け方の傾向と関連性がみられる。しかし、資料数が少ないことや詳細な表採位置が判明していないものも多いことから、現状ではこの分類から厳密な時期差や工人差などについて言及することは難しい。ところで、それまで埴輪を用いていなかった地域に畿内的な整った埴輪が導入された場合、埴輪の中に地域の特徴を部分的に含んでいる例が存在することが指摘されている(安川 2018)。長者スクモ塚第1号古墳は西条盆地において、埴輪が導入された初期の古墳とみられる。そのため、より良好な資料を得ることができれば、本古墳の埴輪に畿内的な要素や在地的な要素が入り混じっていないかという点にも注視し、胎土の差異など他の要素も含めた再分類を行う必要があるだろう⁽¹¹⁾。(下江)

(3) 墳丘形態

これまで長者スクモ塚第1号古墳は後円部に対して前方部が低平かつ短小であることから、墳丘長約60mの帆立貝形古墳とされてきた(古瀬 1991、池西ほか 2016)。帆立貝形古墳の定義については諸説あるものの(石部ほか 1980、櫃本 1984、遊佐 1988、沼澤 2002、2003、2004など)、それらの定義にあてはめると、今回の測量調査の成果から復元した長者スクモ塚第1号古墳の墳丘は帆立貝形古墳の範疇に収まる(第2表)。ところで、広島県域

第2表 主要帆立貝形古墳（前期～中期）の墳丘規模と各部比率（池西ほか2016を筆者改変）

集成編年	古墳	墳丘規模(m)						方丘部高/ 円丘部高	方丘部長/ 円丘部径	方丘部幅/ 円丘部径	方丘部長/ 方丘部幅
		墳長	円丘部径	円丘部高	方丘部長	方丘部幅	方丘部高				
4後～5期	長者スクモ塚1号	60.0	42.5	7.5	19.5	20.5	1.0	0.133	0.459	0.482	0.951
4期	善法寺8号	30.0	21.0	3.5	9.0	12.5	1.0	0.286	0.429	0.595	0.720
4～5期初	丸山神社1号	42.9	33.0	6.5	16.0	14.2	1.8	0.277	0.485	0.430	1.127
4～5期?	新庄龍王1号	51.9	39.4	6.5	13.6	14.4	0.8	0.115	0.345	0.365	0.944
5期	糸井大塚	65.0	56.0	8.0	9.0	19.0	3.0	0.375	0.161	0.339	0.474
7期	八幡山1号	45.0	40.0	6.0	5.0	10.0	1.5	0.250	0.125	0.250	0.500
7期	三玉大塚	41.0	33.3	7.9	7.7	15.0	2.2	0.278	0.231	0.450	0.513

では全国的にみても多くの大型帆立貝形古墳が確認されており、筆者らはそれらが2形態に分けうることを指摘した（池西ほか 2016）。古墳時代中期を中心に備北地域でみられる帆立貝形古墳は幅広で短い方丘部をもつものに対して、東広島市丸山神社第1号古墳（藤野 2015）や庄原市新庄龍王第1号古墳（池西ほか 2016）は幅狭で比較的長い方丘部をもつが、長者スクモ塚第1号古墳は後者の形態的特徴をもっている。とくに平面形態については、丸山神社第1号古墳と類似しており、三ッ城第1号古墳築造以前の西条盆地では、こうした帆立貝形古墳と前方後円墳の中間的形態をもつ大型墳が有力墓として存在していた点に留意する必要がある。畿内では4世紀末に帆立貝形古墳が出現したとされるが（宮本 2013）、奈良県桜井市茅原大墓古墳（桜井市教育委員会 2011）や京都府大山崎町鳥居前古墳（都出編 1990）といった帆立貝形古墳は、前方部（方丘部）が幅広で前面に向けて広がっており、西条盆地のものとは形態がやや異なる。つまり、畿内の帆立貝形古墳と同じ背景のもとで西条盆地の帆立貝形を呈する古墳が出現したとは考えにくく、長者スクモ塚第1号古墳を畿内と同じ基準によって帆立貝形古墳の範疇に含めることは必ずしも適切ではない。長者スクモ塚第1号古墳と丸山神社第1号古墳は帆立貝形系列の前方後円墳ともいふべき在地特有の墳形をもち、畿内の築造原理と共通点の多い前方後円墳である三ッ城第1号古墳⁽¹²⁾とは大きな隔りがあるといえよう。

（4）西条盆地における有力墓⁽¹³⁾の発展

これまで、西条盆地では三ッ城第1号古墳（石井編 2004）を除く有力墓の詳細が不明であったため、集成編年6期に「安芸を代表する大古墳が突如出現する」（古瀬 1991）というような枠組みで語られることが多かった。しかし、近年では千人塚古墳（古瀬編 2010）や丸山神社第1号古墳（藤野 2015）、長者スクモ塚第1号古墳の発掘や測量調査が行われたこともあり、西条盆地の有力墓に関する基礎的資料が蓄積されつつある。そこで、ここではそうした資料を踏まえながら古墳時代前期から中期の西条盆地における有力墓の動態について、在地における独自発展と対外的関係の2つを軸にした予察を試みたい。まずは西条盆地の有力墓の各要素について、他地域性と在地性に注目しながら概観する。

墳丘形態 集成編年2期の才が迫第1号古墳は墳丘長約11.2mの方墳であり、丘陵尾根先端の背後を溝によって区画している。加藤光臣氏によると、このような「溝と若干の墳丘整形によって墳域を表示した形態墳」は「出現期の定型的高塚古墳とともに新たな墓制として各

地に広く波及した」可能性が高い（加藤 2014）。こうした墳形は広島県内で広域的にみられるが、そのほとんどは規模も小さく、在地の特色として捉えるべきだろう。後続する集成編年 2～3 期の原の谷古墳は盛土をもつという違いはあるが、円形とも方形とも考えられる曖昧な墳形から、才が迫第 1 号古墳と変わらず在地の特色をもつものと考えられる。また、集成編年 4 期の千人塚古墳は墳丘径約 24.0m の円墳と想定されており、これも畿内を含めた他地域からの「規制」などがあったとは考えにくい。さらに、帆立貝形を呈する丸山神社第 1 号古墳や長者スクモ塚第 1 号古墳の墳形は先に述べたとおり在地特有の墳形であり、畿内の帆立貝形古墳とは築造背景が異なる可能性が高い。集成編年 6 期の三ッ城第 1 号古墳の墳形は北條芳隆氏らが指摘するように（北條 1997）、畿内や吉備の首長墳との類似性が非常に高いと考えられる。

外表施設 西条盆地において葺石や埴輪が確認された有力墓として、白鳥古墳、丸山神社第 1 号古墳、長者スクモ塚第 1 号古墳、三ッ城第 1 号古墳が挙げられる。このうち、三ッ城第 1 号古墳以外は発掘調査が行われていないため、その詳細は不明である。三ッ城第 1 号古墳の円筒埴輪は一部の個体に Bd 種ヨコハケが施されるなど、比較的整った形態をもつ。同工品認定や工房経営の復原などが行われていないため断定はできないが、他地域との交流を窺うことができる。また、墳丘頂部でまとまって出土した家形埴輪や造出から出土した須恵器などの存在からも、畿内を含む他地域との関係を強く見出すことができる（石井編 2004）。

一方、丸山神社第 1 号古墳では墳丘背面から壺形埴輪が表採されており、埴裾を取り巻くように樹立されていた可能性が高いと指摘されている（藤野 2015）。こうした状況は広島県福山市尾ノ上古墳でも確認されているが（福島 1999）、丸山神社第 1 号古墳は発掘調査が行われていないこともあり、現時点では他地域との交流について言及することは難しい。長者スクモ塚第 1 号古墳では葺石と円筒埴輪、家形埴輪が確認されている。円筒埴輪はいずれも細片であるため詳細は不明だが、広島県三次市宮の本第 24 号古墳（梅本編 2013）や広島県尾道市黒崎山古墳（潮見 1969）で出土した埴輪のように、口縁部が強く外反する個体（安川 2018）は確認されていない。家形埴輪などの存在からは、畿内との交流を示している可能性も考えられる。

埋葬施設 古墳時代前期から中期の西条盆地では畿内の影響を明確に受けたと考えられる埋葬施設は確認されていない。才が迫第 1 号古墳は堅穴式石室を 2 基もつが、長大型の堅穴式石室とは構造が異なる。1 基は墓壇壁に割石を貼り付けただけの非常に簡略化された石室であり、基底部や控え積みなどをもたない。もう 1 基はいわゆる石棺系小堅穴式石室とされるものであり（福永 1992）、その系譜については更なる検討が必要であるが、少なくとも、畿内中枢からの強い影響は考えにくい。千人塚古墳は墳丘内に 2 基以上の箱形石棺をもつ。中心埋葬とされる第 1 号石棺は、長側辺が 2 枚の石材で構成され、粘土による裏込めをもつなど非常に丁寧な構築がなされている。概要報告では「長持形石棺を強く意識した作りになっていると考えられ、通常の箱形石棺とは全く異なる意味を持つ」とされている（古瀬編 2010）。たしかに、長側辺を少ない数の石材で構築する点などで、通有の箱形石棺とは異なる

る面が認められるものの、側石や蓋石に突起がみられない点や蓋石の断面形がカマボコ形ではなく、長方形を呈する点などをみると、長持形石棺より箱形石棺の方がより近い形態をもっているといえる。つまり、在地の箱形石棺をより丁寧に構築した結果、このような形態になったものと考えたい。三ッ城第1号古墳の埋葬施設は3基検出された。第1号埋葬施設は箱形石棺の周囲に石積みをもつ特異な構造であり、西条盆地では類例がない。他地域では岡山県新見市横見墳墓群（下澤・友成 1977）などに類例があるが、これらは下田所式から亀川上層式に併行するものと思われ、時期的な懸隔が大きい。今後、詳細な検討を行う必要があるが、現時点では三ッ城第1号古墳との直接的なつながりは認めがたい。また、第2号埋葬施設は箱形石棺の外側に箱形の石槨をもっており、これも近隣地域を含めても類例に乏しい。第3号埋葬施設は当地域で普遍的にみられる箱形石棺であるが、棺底に床石を敷く例はそれほど多くはない。このように三ッ城第1号古墳の埋葬施設は当地域においても特異な様相を示す。しかし、畿内を含む他地域の影響も現時点では認められないことから、在地周辺で生み出された形態であったと理解したい。

副葬品 西条盆地の前・中期古墳において、他地域との交流が窺える副葬品は非常に少ない。まず、白鳥古墳出土とされる仿製三角縁神獣鏡が挙げられる。現時点では西条盆地における唯一の出土例であり、畿内政権との関わりが窺える。また、千人塚古墳では石釧の出土が伝えられており（古瀬編 2010）、他地域との繋がりが存在した可能性がある。さらに、渡来系遺物としては三ッ城第1号古墳で鑷子状鉄製品の可能性がある鉄器が出土している（村田 2018）。

墳丘構築法 原の谷古墳では墳丘南側に土手状の盛土を積み上げ、その北側へ順次盛土を積み上げることで一次墳丘を成形する。その後、埋葬施設となる部分を避けるように盛土を積み、竪穴式石室を構築している（出野上 2003）。このように土手状盛土と構築墓壇の両者を組み合わせたものと考えられる。しかし、土手状盛土は墳丘の一部でのみ確認されていることから、「西日本的工法」（青木 2003）の影響を受けた可能性はあるものの、やや疑問が残る。千人塚古墳は「西日本的工法」により墳丘を成形している（古瀬編 2010）。また、第1号石棺は墓壇をもたず、盛土の積み上げと同時に埋葬施設を構築する無墓壇⁽¹⁴⁾の構築法をもつ。無墓壇の構築法は近隣地域では岡山県真備町黒宮大塚古墳（間壁ほか 1977）や、岡山県岡山市矢藤治山弥生墳丘墓（近藤編 1995）、宮の本第24号古墳などで竪穴式石室の構築に用いられている。箱形石棺の構築法としてはかなり入念であり、当該地域では特異なものである。三ッ城第1号古墳は前方部前面などで「土嚢積み技法」が使用された可能性が指摘されている（青木 2003）。また、墓壇は墳頂から掘り込む「掘込墓壇 a 類」（和田 1989）であり、前方後円墳としては普遍的な構築法といえよう。

各要素の浸透過程 さて、ここまで西条盆地における古墳時代前期から中期までの有力墓についてみてきたが、それぞれの要素についてまとめたものが第3表である。各要素の浸透過程について時期別にまとめると、集成編年3期まではほとんどが在地の要素で構成されたものと思われるが、集成編年4期になると少なくとも副葬品において他地域との交流が想定で

第3表 西条盆地の古墳における各要素

集成編年	古墳	墳丘形態	外表施設	埋葬施設	副葬品	墳丘構築法
2期	才が迫1号	×	×	×	×	×
3期	原の谷	×	—	—	—	△
	白鳥	—	—	—	○	—
4期	丸山神社1号	×	△	—	—	—
	千人塚	×	—	×	△	△
4～5期	スクモ塚1号	×	△	—	—	—
6期	三ッ城1号	○	○	×	△	△

○…他地域の影響を明確に受けたもの

×…在地の特色をもつもの

△…他地域の影響を受けた可能性があるもの

—…遺構や遺物が確認されていないか未調査のもの

きる。また、4期から5期では外表施設に他地域との交流が窺えるが、墳形と埋葬施設はあくまでも在地の特徴を保持している。墳丘構築法も同じ時期に「西日本の工法」が採用されているが、現時点でこれを他地域との

交流の結果とみなす根拠は少ない。立地や墳丘規模などを踏まえた詳細な検討が必要であろう。そして、集成編年6期になると墳形と外表施設において明確に他地域との交流を確認することができる。その一方で埋葬施設に関しては、この時期においても畿内との交流を示す共通性や類似性を読み取ることはできない。三ッ城第1号古墳の第1号埋葬施設から、岡山県北部や山陰地方との関係があった可能性があるものの、いまひとつ明確ではない。

西条盆地における有力墓の築造状況 以上の結果から、西条盆地における有力墓の築造状況について、古墳の分布状況とも絡めることで3つの段階を想定できる。第1段階は集成編年1～3期であり、古墳の分布は西条盆地東半の高屋町を中心とし、他地域要素の浸透が明確には認められない。弥生墳墓との連続性、あるいは隔絶性も問題となるが、資料が少ないこともあり現時点では明確には言及できない。第2段階は集成編年4～5期であり、古墳の分布は盆地西半の西条町を中心とし、三角縁神獣鏡などの副葬品や埴輪などの外表施設に他地域要素が浸透する。第3段階は集成編年6期であり、西条町に大型前方後円墳が築造される。副葬品と墳丘構築法については不明瞭だが、墳丘形態と外表施設に他地域要素が明確に浸透する。このように、各要素がある時期において、同時に導入されたわけではなく、段階的に導入していったことが読み取れる。こうした状況は北條芳隆氏の指摘する他地域要素の「選択的導入」(北條 1999)を示す一例といえるのではなかろうか。とくに、三ッ城第1号古墳において、墳丘形態や外表施設といった可視属性については他地域要素を導入する一方で、埋葬施設などの不可視属性については在地の要素を保持している点は興味深い。

以上、古墳時代前期から中期における西条盆地の有力墓について、在地独自の要素と他地域の要素という2つの側面から、その動態について論じた。これまで明らかになっている資料やデータの整理に終始した感は否めないが、今後の調査・研究における指針の一端となれば幸いである。三ッ城第1号古墳の直前に造営されたと推定される長者スクモ塚第1号古墳ではほとんどの要素が不明のままであり、今回提示した西条盆地における有力墓の築造状況を検討するうえで非常に重要な古墳といえよう。(永野)

7. おわりに

長者スクモ塚古墳群第1次調査の成果から、第1号古墳の墳丘規模は墳丘長約60.0m、後円部は短径約40.5m、長径約42.5m、高さ約6.5～7.5m、前方部は長さ約19.5m、幅約20.5m、高さ約0.75～1.0mと推定した。また、表採埴輪の検討から、4世紀末から5世紀初頭に築造され、三ッ城第1号古墳より遡ることを指摘した。さらに、広島県や畿内の帆立貝形古墳との墳丘形態の比較から、西条盆地では畿内の帆立貝形古墳とは異なる背景をもつ、帆立貝形を呈する在地特有の古墳が、三ッ城第1号古墳以前に築造されていた可能性を提示した。

第1号古墳は墳丘形態や規模、埋葬施設をはじめとして、築造年代や詳細な墳丘構築法など、今後明らかにすべき課題は山積している。本誌とともに報告している第2号古墳も含め、長者スクモ塚古墳群は三ッ城第1号古墳築造以前の西条盆地における有力墓の動態や中小古墳の墓制の展開を考えるうえで非常に重要な古墳群といえる。(永野)

長者スクモ塚古墳群の調査を行うにあたって、東広島市教育委員会の妹尾周三氏・中山学氏には調査の準備などで多大なご協力を賜りました。また、広島県立歴史民俗資料館の村田晋氏と島根県埋蔵文化財調査センターの今福拓哉氏には調査や本稿の執筆に関して多くのご教示を賜りました。また、安芸高田市教育委員会の川尻真氏・沖田健太郎氏には甲立古墳出土埴輪の実見を許可していただくとともに、多くのご教示を賜りました。また、広島大学大学院文学研究科の古瀬清秀名誉教授には過去の調査に関する情報など様々のご教示を賜りました。また、広島大学大学院生の名村威彦氏・真木大空氏には本稿の執筆に関して様々のご助言を賜りました。また、広島大学大学院文学研究科の野島永教授・竹広文明教授には現地までのご引率や調査のご指導、本稿の執筆に至るまで多くのご教示を賜りました。末筆ではありますが、記して感謝いたします。

註

(1) 調査参加者は以下のとおりである。

第1次調査(2016年度)：近藤直毅・佐々木尚也・永野智朗・名村威彦・真木大空・佐野珠実・下江裕貴・藤澤昌弘・松本健太・南條 花(広島大学学部生)、陳 劍林(広島大学研究生)
遺物整理・実測：佐々木尚也・名村威彦・真木大空・下江裕貴・藤澤昌弘(広島大学大学院生)、永野智朗・井島大地・陳 劍林・妻藤祐太・西岡日向子(広島大学学部生)

(2) 本稿の作成は測量調査に参加した下江裕貴・藤澤昌弘(広島大学大学院生)と永野智朗(広島大学学部生)が分担して行った。第1節、第7節は永野が、第2節は藤澤と下江が、第3節、第4節、第5節は下江が執筆した。また、第6節は下江と永野が執筆し、下江が編集した。執筆担当は本文の文末にもそれぞれ記載している。なお、墳丘測量図の作成については佐々木尚也(広島大学大学院生)が協力した。遺物の写真撮影は下江・藤澤が行った。

(3) 過去の文献では、現在の第2号古墳を第3号古墳と呼称しているものもあり、名称が錯綜している。この点に関しては、本誌「東広島市長者スクモ塚第2号古墳測量調査」(永野 2018)で第2号古墳の測量調査成果と共に詳しく検討されている。

(4) これまで三ッ城第1号古墳は広島県下最大の古墳とされてきたが、国土地理院が公開している傾斜量図

を用いた調査により、福山市神村町で墳丘長90～100mの前方後円墳と推測される厳島神社古墳が確認されている（藤原 2018）。

- (5) 今回の調査では、1996年時の測量調査で作成された墳丘測量図を原図とした。1996年時の測量調査を指導された当時広島大学文学部助教授（現広島大学名誉教授）の古瀬清秀氏と同助手（現比治山女子大学現代文化学部教授）の安間拓巳氏、調査に参加された同大学院生の中山悦朗、内山ひろせ、三ッ木貴代志、小川晃弘、近藤徹也、同学部生の宇都宮菜乃、亀井美和、栗山葉子、近藤裕樹、下垣 豪、谷川正洋、船越信弘、渡邊秀樹の諸氏には深く感謝いたします。
- (6) 現広島大学名誉教授であり、1996年当時の調査を指導した古瀬清秀氏のご教示による。
- (7) 大阪大学文学部人文学科考古学専修の学生である野島悠之氏のご教示による。
- (8) 部位を特定するために甲立古墳出土の朝顔形埴輪を実見させて頂いたうえで比較した。甲立古墳出土の朝顔形埴輪の場合、傘部上側の突体部の内面は明確な屈曲部をもち、内反する一方で、下側の突体部の内面は滑らかに外反するものが多かった。
- (9) 家形埴輪も部位を特定するため、甲立古墳出土の家形埴輪を実見させて頂いたうえで比較した。
- (10) 土地所有者の松浦勝巳氏によれば、長者スクモ塚古墳群周辺ではよく埴輪が採集されており、なかには馬の形をしたものも含まれていたという。三ッ城第1号古墳でも馬形埴輪と考えられる破片が出土しており（石井編 2004）、長者スクモ塚第1号古墳も豊富な形象埴輪を有していた可能性がある。
- (11) 本文で述べたとおり、円筒埴輪の中には胎土にシャモットと考えられる赤色の粒子を含んだものがある。このシャモットを含んだ胎土の埴輪は、表採数が圧倒的に少ないことや突帯がⅢ類のみであるといった特徴がある。これらのことから、シャモットを含んだ胎土の埴輪は埴輪列の中で破損した個体を補充したもので、時期差を示す可能性も想定できる。しかし、詳細な表採位置が不明であるため、現状ではこの点について詳しく検討することは難しい。よって、今回の検討では胎土の違いは分類に含めない。
- (12) 三ッ城第1号古墳の築造企画については石井隆博氏や北條芳隆氏によって、畿内もしくは吉備の古墳と共通性の高い墳形であることが指摘されている（石井 1997、石井編 2004、北條 1997）。なお、中期古墳の墳丘設計原理については、新納泉氏の優れた論考があり（新納 2011、2015、2018）、三ッ城第1号古墳の墳丘設計原理に関しても今後検討していきたい。
- (13) ここでいう有力墓とは墳丘規模や副葬品といった古墳の属性が他の古墳に比べて優位である古墳を指す。おおまかな基準としては墳丘長が20mを超えることなどを目安にしているが、才が迫第1号古墳のように基準を満たさないものも必要に応じて取り上げている。なお、「首長墓」や「有力墓」といった用語上の問題については下垣仁志氏の検討と提言（下垣 2017）を参考にしている。
- (14) 報告書では「いわゆる構築墓壇をもつ」とされているが（古瀬編 2010）、構築墓壇とは土や石などでもって墓壇を構築する手法のことである（和田 1989）。土層断面図をみる限り、千人塚古墳では墓壇そのものが確認されていないため、無墓壇の手法が用いられたと考えるべきである。

引用・参考文献

- 青木 敬 2003 「墳丘構築方法の再検討」『古墳築造の研究－墳丘から見た古墳の地域性－』六一書房、21～51頁。
- 池田次郎 1954 「三ッ城古墳出土人骨、並びに広島縣下出土の古墳人骨について」『三ッ城古墳』広島縣教育委員会、48～51頁。
- 池西美咲ほか 2016 「庄原市新庄町新庄龍王1号墳の測量調査」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第8号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、47～56頁。
- 石井隆博 1990 「まとめ」『森信第10号古墳発掘調査報告書』東広島市教育委員会、16～19頁。
- 石井隆博 1992 「助平古墳」『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』東広島市教育委

員会、81～97頁。

- 石井隆博 1997 「三ッ城古墳の築造企画」『大型古墳の築造と企画』東広島市教育委員会、12～15頁。
- 石井隆博編 2004 『史跡三ッ城古墳発掘調査報告書』東広島市教育文化振興事業団。
- 石部正志ほか 1980 「帆立貝形古墳の築造企画」『考古学研究』第27巻第2号、85～102頁。
- 岩崎卓也ほか 1992 『史跡森將軍塚古墳』保存整備事業発掘調査報告書、長野県更埴市教育委員会。
- 梅本健治編 2013 『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(29)、広島県教育事業団。
- 恵谷泰典 1994 「原田岡山古墳群」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』X、広島県埋蔵文化財調査センター、139～155頁。
- 大上裕士 1993 「才が迫遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』IX、広島県埋蔵文化財調査センター、19～44頁。
- 加藤光臣 2014 「前期小形古墳の地域相－新迫南遺跡群の再検討を通して」『広島の考古学と文化財保護』広島県の考古学と文化財保護刊行会、125～150頁。
- 川尻 真・沖田健太郎編 2015 『甲立古墳－発掘調査報告書－』安芸高田市教育委員会。
- 川西宏之 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号、1～70頁。
- 近藤義郎編 1991 『前方後円墳集成』中国・四国編、山川出版社。
- 近藤義郎編 1995 『矢藤治山弥生墳丘墓』矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査団。
- 桜井市教育委員会 2011 『国史跡茅原大墓古墳 第4次調査現地説明会資料』桜井市教育委員会。
- 沢元保夫 2007 『三永水源地窯跡群詳細分布調査報告書』東広島市教育文化振興事業団。
- 潮見 浩 1969 「広島県尾道市黒崎山古墳」『日本考古学年報』17、日本考古学協会、162～163頁。
- 下垣仁志 2017 「首長墓系譜論の展開」『畿内の首長墳』平成25～28年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書、立命館大学文学部、605～656頁。
- 下澤公明・友成誠司 1977 「横見墳墓群」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』9、岡山県教育委員会、1～342頁。
- 鈴木 誠・池田次郎 1950 「広島県下箱式石棺出土の人骨に就て」『人類学輯報』第4輯、大阪市立大学医学部解剖学教室、1～8頁。
- 都出比呂志編 1990 『鳥居前古墳』総括編、大阪大学文学部考古学研究室。
- 出野上 靖 2003 『原の谷古墳・原の谷遺跡発掘調査報告書』東広島市教育文化振興事業団。
- 永野智朗 2018 「東広島市長者スクモ塚第2号古墳測量調査」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第10号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、71～86頁。
- 中山 学 1999 『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書』I、東広島市教育文化振興事業団。
- 新納 泉 2011 「前方後円墳の設計原理試論」『考古学研究』第58巻第1号、16～36頁。
- 新納 泉 2015 「誉田御廟山古墳の設計原理」『日本考古学』第39号、53～68頁。
- 新納 泉 2018 「前方後円墳の設計原理と墳丘大型化のプロセス」『国立歴史民俗博物館研究報告』第211集、国立歴史民俗博物館、51～77頁。
- 沼澤 豊 2002～2004 「帆立貝形古墳の築造企画論1～10」『季刊考古学』第79・81～89号、雄山閣。
- 櫃本誠一 1984 「帆立貝形古墳について」『考古学雑誌』第69巻第3号、52～69頁。
- 平尾英希ほか 2015 「三次市吉舎町海田原29号墳の測量調査」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第7号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、93～108頁。
- 広瀬和雄 1991 「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』中国四国編、山川出版社、24～26頁。
- 福島政文 1999 『尾ノ上古墳』福山市教育委員会・福山市埋蔵文化財発掘調査団。
- 福永伸哉 1992 「近畿地方の小堅穴式石室」『長法寺南原古墳の研究』大阪大学南原古墳調査団、129～160頁。

- 藤田 隆 1977 「東広島市と黒瀬町」『広島県史』地誌編、広島県、862～878頁。
- 藤野次史 2015 「東広島市丸山神社古墳群の測量調査」『広島大学埋蔵文化財調査研究紀要』第6号、広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門、97～134頁。
- 藤原好二 2018 「傾斜量図による前方後円墳の確認」『中四研だより』第42号、中国四国前方後円墳研究会、4～7頁。
- 古瀬清秀 1991 「安芸」近藤義郎編『前方後円墳集成』中国四国編、山川出版社、92～94頁。
- 古瀬清秀編 2010 『千人塚古墳』東広島市教育委員会・広島大学文学研究科考古学研究室。
- 北條芳隆 1997 「瀬戸内の大型古墳の築造と企画」『大型古墳の築造と企画』東広島市教育委員会、21～27頁。
- 北條芳隆 1999 「讃岐型前方後円墳の提唱」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室、205～229頁。
- 間壁忠彦ほか 1977 「岡山県真備町黒宮大塚古墳」『倉敷考古館研究集報』第13号、倉敷考古館、1～55頁。
- 松崎寿和 1979 「古墳時代」『広島県史』考古編、広島県、424頁、436頁。
- 松崎寿和ほか 1954 『三ツ城古墳』広島縣教育委員会。
- 宮本繁雄 2013 「畿内の帆立貝式古墳の出現」『上代文化』第43輯、上代文化研究会、44～48頁。
- 村田 晋 2018 「広島県」『中期古墳の現状と課題』Ⅱ、中国四国前方後円墳研究会、45～52頁。
- 村田 晋ほか 2014 「三次市吉舎町海田原20号墳の測量調査」『広島大学考古学研究室紀要』第6号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、103～115頁。
- 安川 満 2018 「岡山県」『中期古墳研究の現状と課題』Ⅱ、中国四国前方後円墳研究会、55～70頁。
- 遊佐和敏 1988 『帆立貝式古墳』同成社。
- 脇坂光彦 1997 「御菌宇龍王山古墳の発掘調査」『芸備』第26集、芸備友の会、120～147頁。
- 和田晴吾 1989 「葬制の変遷」『古墳時代の王と民衆 古代史復元』6、講談社、105～119頁。

Topographical Survey of the Chōja Sukumozuka Mounded Tomb No.1 in Saijō, Higashi-Hiroshima City

Hiroki SHIMOE, Tomoro NAGANO, Masahiro FUJISAWA

The Chōja Sukumozuka mounded tomb No.1 is located in Saijō-chō, Higashi-Hiroshima City, and believed to be a scallop-shaped mounded tomb Hiroshima Prefecture. Because the northeastern part of Hiroshima Prefecture has many scallop-shaped mounded tombs, the Chōja Sukumozuka mounded tomb No.1 has been thought to be similar to them. However, according to our recent research, there is a possibility that the shape and background of Chōja Sukumozuka mounded tomb No.1 differ from those of other northeastern scallop-shaped mounds. For this reason, as part of “Field Practice in Archaeology A and B” for the archaeology majors at the Hiroshima University School of Letters, we conducted a topographical survey of this mound with the aim of clarifying its scale, shape, and date of construction in August and September, 2017. The results of this survey indicated that the total length of the Chōja Sukumozuka mounded tomb No.1 is 60.0m; 19.5m for the square front part and 40.5m the round rear portion. In addition, various kinds of haniwa fragments of cylindrical, morning glory-shaped, sunshade-shaped and house-shaped ones were collected from the mound. Features of its cylindrical haniwa indicate that this mound was constructed between the end of the 4th century AD and the beginning of the 5th century AD. Based on the results of this survey, the shape of the Chōja Sukumozuka mounded tomb No.1 is a middle form of a keyhole-shaped and a scallop-shaped mound; therefore, the shape is different from those of the scallop-shaped mounds in the northeastern part of Hiroshima Prefecture and the Kinai Region, which were constructed in the same phase. In conclusion, we can assume that Chōja Sukumozuka mounded tomb No.1 and Maruyama Shrine mounded tomb No.1 have a different background from other areas which have scallop-shaped mound tombs. Therefore, the scallop-shaped mounded tombs in the Saijō basin were adopted as a local, unique mound shape before the Mitsujō mounded tomb No.1 was constructed.

長者スクモ塚第1号古墳

図版第1



a. 1970年調査時第1号古墳近景（北西から）



b. 古墳群遠景（西から）

長者スクモ塚第1号古墳

図版第2



a. 前方部（後円部頂から）



b. 後円部（前方部上から）

長者スクモ塚第1号古墳

図版第3



a. 前方部南西側測量調査風景（東から）



b. 長者スクモ塚第1号古墳表採埴輪

長者スクモ塚第1号古墳

図版第4



a. 長者スクモ塚古墳群表採埴輪 (1)



b. 長者スクモ塚古墳群表採埴輪 (2)

長者スクモ塚第1号古墳

図版第5



a. 長者スクモ塚古墳群表採埴輪 (3)



b. 長者スクモ塚古墳群表採埴輪 (4)

長者スクモ塚第1号古墳

図版第6



a. 左：シャモットを含む胎土 (1) 右：シャモットを含まない胎土 (7)



b. 長者スクモ塚第1号古墳表採白礫